『主を待ち望む』

2024 年 6 月 23 日

土浦めぐみ教会礼拝説教

詩篇 130：1～8

＜挨拶＞

本日は常磐宣教区の講壇交換で、このように土浦めぐみ教会の礼拝に出席させていただき、ご一緒に主の御言葉に聴くことが許され感謝いたします。

守谷聖書教会の牧師の鈴木洋宣と申します。

1998 年に東京基督教大学を卒業し、1999 年 4 月より取手聖書教会伝道師に赴任。取手聖書教会が守谷市に開拓伝道開始。2002 年 1 月より守谷聖書教会主日礼拝開始、現在に至っている。

＜祈祷＞

「天の父なる神様、御名を賛美いたします。

この時、御言葉に聴いていきます。ご聖霊が私たちにお語りください。

待ち望み、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。」

＜序論＞

私たちの歩みには、喜びや悲しみを経験しながら歩んでおります。そして、苦しみや悲しみと言っても、一時的なものであったり、どこかゆとりがあったり、自分で何とか解決しようとして道が開かれていくということもあります。

でも、私たちの歩みにおいて、自分で何とかしようとしてもどうにもならない、その中でもがき、恐れ、苦しむそんな苦境の中に置かれることも経験せられることがあります。

本日は、詩篇 130 篇の御言葉にご一緒に聴いていきますが、詩人はまさにそのような苦境の中に置かれておりました。

詩人は、この時、個人的にもそして国家的（イスラエルの民ということ）にも危機的な状況、状態の中にあり、深い苦しみを覚えていました。

＜本論 1＞

「1 【主】よ深い淵から私はあなたを呼び求めます。
2 主よ私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。(v1、v2)」

「深い淵から」と歌っています。

苦しみの深さを表しているでしょう。

長い期間、そのような苦しみの中に置かれていたのでしょう。

明日への光、希望がわずかも見えてこないという中に置かれていたのでしょう。いいえ、少し光が見えてきた、でも、また直ぐにその希望の光は消えていった、そのようなことの繰り返しであったのかもしれません。

神さまに、祈っていないわけではありません。祈っておりました。願いました。

でも、救いの光が見えてこない、回復の光が見えてこない、神さまが姿を隠されている、そんな状態が続いていたのでしょう。

「深い淵」ということにおいて、同じような詩篇があります。69 篇です。

「69:1 神よ私をお救いください。水が喉にまで入って来ました。
69:2 私は深い泥沼に沈み足がかりもありません。私は大水の底に陥り奔流が私を押し流しています。
69:3 私は叫んで疲れ果て喉は渇き目も衰え果てました。私の神を待ちわびて。
69:4 ゆえなく私を憎む者は私の髪の毛よりも多く私を滅ぼそうとする者私の敵偽り者は強いのです。私は奪わなかった物さえ返さなければならないのですか。
69:5 神よあなたは私の愚かさをご存じです。私の数々の罪過はあなたに隠されていません。」

「足がかりもありません」自分で自分を救いえないような状態、境遇です。

この詩篇は、表題に「都上りの歌」とありますが、バビロニア捕囚を

背景としていたとも考えられます。

私たちの信仰の歩みおいても、このような状態、状況に置かれることがあるのでないでしょうか。

深く、長い苦しみの中に置かれます。

神さまに願い、祈り求めますが、その苦しみ、痛みにおいて光が見えてこないのです。

何とか解決の糸口をと思うのですが、もがけばもがくほど恐れや絶望や実際に悪い結果になっていくという中に置かれることがあるでしょう。

自らのことがあるでしょう。家族のことであるかもしれません。私たちの置かれた持ち場のことであるかもしれません。また私たちの愛する教会のことであるかもしれません。

＜本論 2＞

そういう中で、詩人は自らの罪を覚えていました。

「3 【主】よ　あなたがもし不義に目を留められるなら主よだれが御前に立てるでしょう。

先ほどの詩篇 69 篇も「69:5 神よあなたは私の愚かさをご存じです。私の数々の罪過はあなたに隠されていません。」とありました。

バビロニア捕囚は、神の民イスラエルが神に背を向け、神を神とせずにいた罪に対する神の裁きでした。

詩人は、神の裁きの前に誰も立ちえないことを覚えております。詩人は、自らと民の罪（不義）への神の裁きを覚えています。自分の愚かさを、自分の罪を神の前に恐れています。

罪を正しく裁かれる神への恐れ、立ちえないという恐れがあります。

不義について、罪について神を本当に恐れています。

そして、「しかし」と続けて、その神には、「赦しがある」と歌っています。あわれみ深い神であられることを覚えております。

「4 しかしあなたが赦してくださるゆえにあなたは人に恐れられます。」

神の前に立ちえない、しかし神はそういう自分たちを滅ぼしてしまうことなく、見捨て切ってしまうことなく、憐み、赦してくださると歌ったのです。

憐れみ深き神を崇めています。

そして、詩人は、その赦しのゆえに、「あなたは人に恐れられます(v3)」と続けるのです。

自分の愚かさを、悪を嘆きました。

しかし、憐れみ赦してくださる神を恐れる、敬うと歌うのです。

赦してくださるので、神さまを「ただ優しいお方」とするというのではないのです。

神を敬う、恐れる。

神の憐れみ、赦しは、神への恐れを失わせるのではありませんでした。

神さまの憐れみは、赦しは、人を神への真の恐れへと向かわせていきます。

それは、神を怖がる、びくびくするというのではありません。かといって、罪を犯しても平気、赦されるから。そんな態度でもありません。

神を敬い、悪を恐れる、罪を悲しむ、悪から離れている、そういう恐れです。

新約時代に生きる教会、私たち一人ひとりも神への恐れをもって歩んでいきます。

神は義なるお方です。罪を正しく裁かれるお方です。私たちは罪のゆえに神の前に立ちえなかったのです。しかし、神は、私たちを愛し、御子イエス・キリストの十字架の身代わりの死によって、すべての罪を赦し、神との交わりを回復させ、神の子どもとしてくださいました。

大胆に、赦しを確信して、神さまを、「父よ」と近づくことができます。

神をびくびくするのではありません。

でも、神さまの前にひれ伏す、悪を離れて、神の前にふさわしくないことは神の前に正直に告白し、神を敬っていきます。

ロイドジョンズという英国の説教者は、クリスチャンとは「罪赦されたことを驚いている人の事である」というようなことを述べております。

義なる神の前に、裁かれ、罪と永遠の死に定められるべき者が、御子イエス・キリストの十字架のゆえに赦されている、神の永遠の裁きから救われている、その神の憐れみを感謝し、驚き、神を敬っているのがクリスチャンです。

罪を軽いこととし、赦しを当然とし、赦しを軽いものとしてはなりません。

赦されざるべき私たちが、神の憐れみにより、御子イエス・キリストの十字架の身代わりの死によって赦されたのです。

その神の憐れみのゆえに、神への恐れ敬いを失う歩みではなく、神の赦しの憐れみの大きさを知り、おののき、それゆえに「神を恐れ敬う」のが、クリスチャンの歩みです。

そして、神を恐れることは、決してクリスチャンの喜びと自由を奪うものではなく、本当の意味でクリスチャンの喜びと自由の中に生かされていく歩みであるのです。

＜本論 3＞

詩人は、憐れみ深き主を確信し、神を恐れ敬いつつ告白しました。

「5 私は【主】を待ち望みます。私のたましいは待ち望みます。主のみことばを私は待ちます。

6 私のたましいは夜回りが夜明けをまことに夜回りが夜明けを待つのにまさって主を待ちます。」

この深い苦しみの中で、詩人は「主を待ち望みます」と告白したのです。

繰り返し「待ち望みます」「待ち望みます」「待ちます」と歌っています。

そして、主を待つということは、主のみことばを私は待ちます、と歌っております。

そして、7 節には、こうイスラエルの民に向かっても「主を待て」と

促しております。

「主には恵みがあり　豊かな贖いがある。主は　すべての不義からイスラエルを贖い出される（v7)」とあります。

それはどういうことを表しているのか。

「豊かな贖いがある」と言われていますが、今私たちが長い間苦しんでいること、解決していく、状況が変えられていく、そういうこともあります。

それを祈っていきたいです。

でも、それだけではなく、「豊かな贖いがある」、その状況を抱えたままなのだけれども、私たち自身が神さまの御手の中で練り清められていくということも「豊かな贖い」に入っています。

私たちの抱えているその課題、問題は解決しないのだけれども、でもその私たちが練り聖められていくということの中で、私たちの周りに神さまのご計画、救いの御業が表されていくということがあるでしょう。

私たちの教会においても、家族のことで長い深い痛みを抱えている、本当にそのことを抱えながら、闘っているからこそ、教会の兄弟姉妹、牧師がその方の存在や言葉や祈りが慰めとなる、神の御国が広がっているということを深く経験せられています。

そのようなことは苦しんでいる本人には言えないのですけれども、でも、そういう歩みをなされておられるのですね。

そして、やはり、最終的には、天の御国こそ、私たちの贖いです。私たちは、この地上では旅人であり、天の御国こそ私たちの最終的な望み、希望であるのです。

ですから、主を待ちます。

少し旧約聖書の人物を考えてみたいのです。アブラハムは、神の約束がなるまで、待ちました。

ヤコブも、兄が弟に仕えるという神の言葉を、待ちました。

ヨセフも、夢で兄たちが自分に仕えるようになるということまで、待ちました。

彼らは、罪の歩みがなかったのではありません。

アブラハムは、待つことが出来ず、ハガルに入りました。

ヤコブは、長子の祝福を父イサクをだましてエサウから奪いました。

ヨセフは、父ヤコブに兄たちの告げ口をし、また高慢にも見た夢を兄たちにそのまま告げ、兄たちに憎まれ、エジプトに売られました。

しかし、彼らは、いずれも神の憐れみにすがり、主を待ち望んでいき、神の言葉が実現していったのです。

（例）先日、教会学校で、キリスト教案誌『成長』にそって、ヨセフ物語を見ました。ヨセフは、（先ほども申し上げましたが）父ヤコブに兄たちの告げ口をし、そして、傲慢さゆえに、言わなければいいのに、兄たちや父に、自分にひれ伏す夢を見たと話し、兄たちは怒り、ヨセフを殺そうとし、そしてヨセフはエジプトに売られていきました。

しかし、聖書は何と続いているでしょうか。主はヨセフとともにおられました。主には赦しがありました。憐れみ深い方でした。

そして、ヨセフは、その 13 年後、エジプトの宰相となり、やがて神の救いのご計画の中で、父ヤコブを、兄たちを救うことになっていったのです。

神の救いの計画の中で、神の救いの御業、贖いの御業がなり、ヨセフが用いられて、ヤコブの家族が救われていきます。

ヨセフは、神のことばなるまで、憐み深い神によりすがり、待ちました。

そのメッセージを教会学校で聞かれた未信者のお母さんが、妻にお手紙をくれました。

今本当に家族はばらばらで、それは自分のいたらなさがあったと思っている。

でも、そういう私たち家族を、探し出し、照らして導いてくださる神さまはつなぎ合わせてくださると信頼して、歩んでいきたいと、そのようなことをお書きくださっておられました。

自分の愚かさ、弱さを認め、神の憐れみにすがり、望みを抱いて歩む

姿を見ました。

本当に、励まされました。

主は憐み深いお方です。主には豊かな贖いがあるのです。

主を待ちたいと願います。

私たちは、この詩人のように、神が隠れてしまっているような深い淵から、切に祈りたいと願います。

詩人は「主のみことばを私は待ちます」と歌っていますが、見える状況は本当に苦しいのですが、そこで神への信頼が揺さぶられるのですが、「みことばを待ちます」と、何度も、主のみことばに立ち返っていきたいと願います。

主を待てず、不安に満ち、自分が出過ぎて、人にあたってしまう失敗もあるでしょう。

でも、主は憐み深いお方であられますから、再び、主に信頼して、主の豊かな贖いを、憐れみを受け取らせていただきたいと願います。

＜結論＞

「イスラエルよ　主を待て。

主には恵みがあり　豊かな贖いがある。

主は　すべての不義からイスラエルを贖い出される」

この御言葉に聴き、この御言葉の約束に立ち返って、新しい週を主を恐れ主を信頼し歩み出していきましょう。

＜祈祷＞